

新技術・情報名	タマネギ若苗利用による栽培技術体系
実施場所	三重県農業技術センター
分類	※②

1. 成果の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

タマネギ栽培は、定植本数が10a当り5万本以上と多く、育苗・定植に多労を要することから、小型機械による定植と育苗箱育苗を合わせて検討し、若苗利用による栽培体系を確立した。

(1) 品種：早生系(0X等)を用いる。

(2) 育苗：雨よけハウス内でみのる式ポット育苗箱(箱当り448穴)を用い磁石式は種機を使用し、30~40日育苗を行う。育苗培土はポット穴(上部16mm、下部13mm、深さ25mm)が小さいことから、排水性、保水性の良いものを採用し、育苗箱置床は、N成分量で1kg当り10gの施肥を行い、生育を促進させる。

育苗管理は、発芽前日まで遮光と水管理の徹底を図る。

(3) 本ば：機械定植(みのる式穴開移植機、畦幅100cm、4株植、株間105cm)を行い、10a当り35300株植えとし、苗は定植3日前に12~15cmに剪葉して定植苗立率の向上を図る。施肥法は慣行に準ずるが、追肥量で定植直後追肥としてN成分量で10a当り5kg程度を増施して年内生育を促進させる。定植は、9月下旬~10月上旬(慣行より30日程度早い)が適当である。

2) 技術・情報の適用効果

(1) 育苗日数が少なく、育苗期間の病害発生等が軽減出来る。

(2) 苗取り、定植作業が軽減出来る。

(3) 共同育苗等の可能性が見込まれる。

3) 適用範囲

県下タマネギ地帯(本ばの粘質土地帯は除く)

4) 普及指導上の留意点

(1) 発芽苗立率を高めるため、遮光、灌水管理を徹底する。

(2) 定植前には、灌水制限し根鉢部分を回くすると共に、定植直前には

十分灌水して苗の鉢離れを良くする。

(3) ほ場の碎土、均平化を徹底し、整地後直ちに定植して活着を促進する。

(4) 除草体系は、慣行に準じ必ず行う。

(5) 機械定植は、マルチ栽培は場に向かない。

(6) 病害虫防除は、特に生育初期徹底する。

2. 具体的データ(図表)

表1 灌水と発芽

区名	発芽率
3回台	86%
1回	53

表2 育苗の種機管理と発芽

区名	発芽率
黒川メイヤ高張 + 黒川メイヤバタガリ	81%
メイヤバタガリ + 黒川メイヤバタガリ	87
黒川メイヤバタガリのみ	54
黒川メイヤ高張のみ	80

表3 育苗日数と収量(慣行)

区名	1球重	
	1930種	1/4種
60日	233g	224g
50	229	214
40	190	190
30	154	105

表4 育苗箱置床施肥と収量(30日 1/4種)

区名	定植苗		収穫		可販球 1kg当り	
	草丈	100株重	1球重	LX上1球換算収量	LX上1球換算収量	LX上1球換算収量
無肥料	14.6cm	24.8g	15.9g	5.9%	4.94kg	
標肥	20.5	66.0	24.5	9.4	6.82	
多肥	18.7	58.0	24.9	8.9	7.74	

表5 剪葉の有無と収量(50日 1/4種)

区名	収穫時		1kg当り	
	草丈	1球重	正帯率	換算収量
剪葉有	4.94cm	12.9g	92%	3.44kg
剪葉無	51.3	131	87	350

表6 定植時期・本ば施肥量と収量(30日)

区名	1球重	可販球 LIX上		1kg当り		高品質率
		抽率	分球率	換算収量	換算収量	
9/20 標肥	268g	97%	12%	15%	653kg	69%
定植 多肥	284	98	8	16	692	69
19/3 標肥	242	92	3	0	786	92
定植 多肥	255	88	2	0	846	94

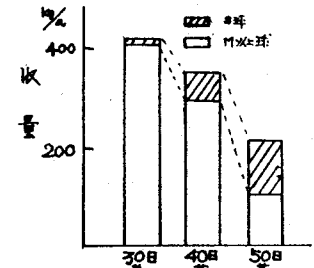


図1 育苗日数と収量(可販球) (1/4種 ポット苗)

表7 機械植・手植による収量(200苗、ポット苗)

区名	1球重	可販球 SX上		換算収量
		抽率	分球率	
機械植	248g	71%	8.25kg	
手植	275	81	8.93	

3. その他特記事項

ネギ類の育苗移植の機械化栽培技術の確立 昭和57~60年 嵯助